
お人好しの牛乳

後藤詩門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お人好しの牛乳

【Zコード】

Z3701E

【作者名】

後藤詩門

【あらすじ】

深夜2時、毎日のように牛乳を買ってくる女。彼女の魂胆は……

「コンビニに牛乳を買いにくる客は意外と多い。
もちろん若い子はあまりいない。

対象はお年よりや奥様方だ。

健康のために飲んでいるのか、最近では〇一風の客も多く購入してくれるようになった。

お陰げ様で牛乳は超ヒット商品ではないが、息の長いロングセラーとなつていてる。

だから、深夜にもかかわらず二十代くらいの若い女性が、1リットル入りの牛乳パックを2本買おうが気にはならない。
しかし、それが一ヶ月も続くとなると……

「また来ますよ、店長」

そう囁いたのは最近雇ったアルバイトの学生。

今年厄年になる妻から、「深夜のコンビニは強盗に狙われやすいから心配だわ。それにあなたはお人好しだし」と言われ、屈強な体育会系のバイトを新しく雇つたのだ。

なかなか眞面目に働いてくれてるので、40を過ぎてめつきり体力の落ちた店長の私には有り難い存在となつていてる。

「やっぱり牛乳買つんすかね？」

日焼けした顔に笑みを浮かべてバイト君が囁く。

店内には我々の他には誰もない。

カウンターに並ぶ私と彼、そして客の彼女の三人きり。

この一ヶ月、きつかり深夜2時に牛乳を買いにくる女客である。

何故だか少し気味が悪い。

「……たぶんな」

私は彼女から視線を離さずバイト君に答えた。
女は、特徴のない顔立ち……といふか化粧つけのまるで無い、ど
こか陰のある顔。

そして、どこにでもありそうなTシャツにGパンといつ質素な服
そうだった。

痩せた腕に抱えるものは、いつもの牛乳が2パック。
そう、いつも通り。

妙にいわくありげなその客に、不気味ながらも好奇心はかきたて
られる。

一体どんな人物なのか……

「本当に店長が言つてたみたいに、幽霊だつたりして」

ニヤニヤしながら言つバイト君。

私は沈黙することで返答する。

もちろん、少し黙つてろといふ意味。

彼の言つた幽霊というのは、私が以前話してやつた地元の怪談話
のこと。

簡単に言えばこんな内容である。

まだ、戦後を色濃く残した昭和の時代。

高知県のとある小学校で毎日牛乳パック（昔懐かしの三角形のも
のだ）が一つ足りなくなる事件が起こった。

給食のおばさん達が犯人を突き止めるべく、ある日の朝、牛乳が

配達される前に学校に陣取つて見張つていた。

はじめは浮浪者の仕業かと思われたが、ふたを開けてみればなんと二十五、六の女性が犯人だった。

おばさん達は女に、「そんなことしたら黙日ですよ」と声をかけた。

すると、彼女は牛乳パックを抱えたままスタスターその場を離れたのだ。

後を追うおばさん達。

牛乳パックを抱えた彼女は、学校近くの森へスウッと消えていった。

慌てて付近を懸命に探す。

そこで彼女達が見つけたものとは……

白骨化した女性の死体と、生後2ヶ月くらいの赤ちゃん（からうじて息のある）だった。

後に警察の調べで分かつた事であるが、女性は病氣を苦にしての自殺だつたらしい。

恐らく、赤子と無理心中を図ろうとしたのである。

だが、いざとなると我が子を道連れにはできなかつた。

つまり学校給食から毎日一つ失われていた牛乳は、生き残つてしまつた赤ちゃんに飲ませるため、死んだ母が幽靈になつてまでも盗んでいたのだというお話。

失礼な事が私には、この女幽靈と例の陰気な女性客がダブつて見えていた。

若い女性がこの一ヶ月間、毎日1リットル入り牛乳パックを2本も購入するなんて信じられない。

それも深夜2時。

何か訳がある。

私は、そう睨んでいた。

まあ、彼女が幽霊とは思わないが……何か裏がありそعدだと私の第六感が教えてくれるのだ。

そして、今日もまた……

女は牛乳を2本小脇に抱えている。

そう、同じ事の繰り返し。いつもと同じだと思つていた。

だが、その時。

「あっ、お客様。お金……」

突然だった。

あの女性客が牛乳を抱えたまま、脱兎の如く駆け出したのだ。自動ドアをすり抜け走り出した女。

あつという間に見えなくなつた。

暫く呆然としていた私だが、すぐに我にかえる。

「ま、万引きか？」

信じられなかつた。

だがそんな私の声にバイト君が素早く反応する。

「お、追い掛けください店長。ここは僕に任せでー！」

「お、おひ！」

私は促されるまま彼女を追つた。

女はかなりのスピードで走っていたが、何とか見失う事なくついでいく。

どれくらい走つただろう？

国道をひた走り、とうとう町外れにまで来てしまった。

そして、ここあたりで私の体力は限界がきた。

息が切れてもう走れない。

よく考えたら私じゃなくてバイト君に追わせれば良かったのだ。
こんな時のための体育会系だろ！

だが、時すでに遅しだ。

ついに力尽きた私は悔しまぎれにこう叫ぶ。

「ま、待て、逃げきれるもんじゃないぞ！ お前の顔は防犯カメラ
にだつて写っているんだからな」

すると、それまで快調に走っていた女がピタリと止まった。

(え？、どうして？)

どうみても私より体力は残っているように見える女。

一体、何故だ？

すると女は、ゆっくり振り向き不敵な笑みを私に向ける。
いつたい何がおかしいのか？

大胆不敵なその態度に何だがとっても腹がたつ。

すると、ぜえぜえ荒い息を吐いている私に、彼女が近づきながら
こう言った。

「『苦勞様、店長さん。もう鬼』ってのはおしまいにするわ。はい、
これお返ししますね」

なんと彼女はうずくまる私の足元に2本の牛乳を置いた。
あまりのあつけなさにキヨトンとしてしまう私。

「『じめんなさいね、私もかし陸上部だったから足は速いの』
なるほど、彼女は息一つ乱れない。
たが、だったら何故そのまま逃げない？

「それじゃあ」

彼女は爽やかに笑うと、また軽快な走りで私の元から去つていった。

ますます訳が分からぬ。

だが、混乱はするが盗まれた牛乳は取り戻した。
商品を手元に引き寄せてから、ようやく立ち上がる。
私は、何とかコンビニへと戻つていった。

道すがら、（何故彼女はあんなことをしたのだろうか？）と考えながら歩いた。

帰りの道中にはまつたく分からないままであつたが、コンビニに帰つた時その謎は全て解けた。

どうしてかつて？

それは、店の商品といつ商品が全て盗まれていたからだ。
ついでに、体育会系のあのバイト君も消えていた。

「や、やられたなあ」

もうすぐ夜明けだとこつこつ、コンビニは何も残されていない

のだ。

朝食を買いにくるサラリーマンや〇〇、そういう学生さん達に申し訳ない気持ちでいっぱいである。

それにしても近頃の学生は……頭も良いし度胸があるよとひくべり思う。

バイト君と牛乳を買いに来ていた彼女はグルだったのだ。
私に彼女の後を追わせそのスキに店の商品をいただくという作戦。
幽霊云々は私に付き合つた芝居なのだろう。

はなから商品目当てでバイトに来ていたと思われる。

防犯カメラのスイッチはバイト君に切られていて何も写つていない。

恐らく他にも共犯がいたのかもしれない。

何もかも……乾電池すら残さずに持つて行かれた。彼一人にしては手際が良すぎる。

当然というべきかバイト君の名前も住所も偽であろう。

それにしても、まんまと騙された私もふがいない。
すぐに警察に電話して、お巡りさんに来てもらい、全てを話した。
処理が終るとほっとしたせいか……私は、自分の喉がカラカラなのに気がついた。

手元には女から取り返した牛乳パックが2本ある。
だが、今は何だかビールが無性に飲みたかった。

私は牛乳パックを空になつたコンビニの片隅にそつと置き、久しぶりに長期休暇になりそうな職場を後にした。
家に帰ろう。

すでに日は昇り、朝日がまぶしいくらいに私を照らす。
もうすぐ夏だ。

照りつける初夏の陽射しに、私は一つの決意を固めていた。

それは……帰つてすぐにビールを飲もうという決意。今日はくらいは、朝から酒を飲んでもバチはあるまい。

だが、家に帰つて私は驚いた。

冷蔵庫を開けてみたらビールどころか牛乳すら置いてなかつたのだ。

この時になつて、よつやく私の心にムラムラと怒りの炎が湧いてくる。

「くそっ、あの女め！ セめて冷えた缶ビールを盗んでくれれば良かったのに

その後、事情を全て話した妻に呆れた顔でこいつ言われた。

「やつぱりあなたはお人好しね」と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3701e/>

お人好しの牛乳

2010年12月18日14時22分発行